

過去への“挑戦”が詰め込まれた 19年ぶりの新モデル

クラシック音楽の花形楽器のひとつであるチェロ。協奏曲や無伴奏の曲をはじめ、チェロが主役となる作品も多い。加えて、音楽のジャンルレス化が進む近年では、ポップスやロックなどのポピュラー・ミュージックでもチェロが活躍する場が増えている。その象徴ともいえるのが、2010年代を駆け抜けるように活動し、2022年に惜しまれつつ解散した2CELLOSだ。マイケル・ジャクソンやU2といったロック・ポップス界のアイコンたちの楽曲を2本のチェロで縦横無尽にカバーする彼らは、そのサウンドはもちろんステージ映えも含めて新しい時代の到来を感じさせた。

今回紹介するサイレントチェロ™「SVC300シリーズ」の開発において、音作りを担当したヤマハの中山大輔さんは、プライベートでチェロを演奏し、学生時代には先生に就いて習い、

オーケストラにも所属していたが、ちょうどその頃デビューした2CELLOSに衝撃を受けたのだという。

「ロックやポップスを、チェロを使ってこんなにもカッコよく演奏できるんだ、と思いました。それで友だちと2人で耳コピして真似して遊んでいたんですけど、当時は機材や音作りについての知識がほとんどなく、アコースティックのチェロだけでは味わえない表現の可能性があることを知りました」

当時からロックやポップスをスタジオリッシュに演奏できる楽器が欲しい、と願っていた中山さんにとって、「SVC300シリーズ」の開発は、いわば念願のプロジェクトだったに違いない。もうひとり、今回話を伺ったのは、設計を担当した宮崎交司さん。チェロのみならず、これまでサイレント弦楽器の開発に広く携わって

きた宮崎さんは、20年近くにわたって現役だった完成度の高い先代モデルをいかに超えるかという過去への“挑戦”を「SVC300シリーズ」を開発するテーマに据えた。

そして、開発に協力したのはチェリストの柏木広樹氏。1980年代からアコースティック楽器を使ったインストゥルメンタル・バンドG-CLEFへの参加やソロ活動を通じて、ジャンルレスな音楽を作り続けている彼が「SVC300シリーズ」の開発に関わったのはいわば必然だったかもしれない。

胴共鳴のシミュレーションにより かつてない豊かな音色を実現

今回の「SVC300シリーズ」のラインアップは、ステージ映えるシャープなデザインとエッジの効いた音色を持つ「SVC300C」と、ア

コースティックチェロのシルエットをイメージさせるフォルムと温かな音色が特徴の「SVC300F」の2種類。前者はロックやポップスの現場で本領を発揮し、後者はクラシック音楽の奏者が容易に持ち替えられるようにデザインされている。両者の違いは見た目だけにとどまらず、サウンド面でも異なるチューニングがなされているという。サウンド面の中核を担うのは、サイレントチェロに初めて採用された「SRTパワードシステム」だ。「アコースティックチェロが持つ胴の共鳴をシミュレートして、ピックアップが拾った音、つまり自分が演奏した音に対して、自然な響きとしてリアルタイムで付加していくのが『SRTパワードシステム』です。先代モデルでも、楽器の構造が生み出す音の作り込みは、かなり高い完成度で行われています。その土台の上に胴共鳴をシミュレートした音も加えることで、より豊かな表現ができるようになりました」（宮崎さん）



本体の設計と全体のディレクションを担当した宮崎交司さん(左)と、音作りを担当した中山大輔さん(右)。そのほか電気設計やソフトウェア開発などを担当するメンバーをコアとして、「SVC300シリーズ」は開発された。

ピックアップからの音と胴共鳴をシミュレートした音は本体側面のコントロールパネルでブレンドすることができ、例えばアコースティックな響きにしたい場合はシミュレートの音を多めに、逆にタイトな音が欲しいときにはピックアップの音を多めにするなどの調整が可能になった。「SVC300用にチューニングされたリバーブやイコライザーも搭載しており、コントロールパネル上で『使える音』を作り込むことができるのもポイント。加えて、2種類の異なるサウンドタイプを搭載しました。ひとつは演奏者のポジションで聴こえる音、も

うひとつはマイクを立てて録音した音、つまり客席やCDで聴くような第三者の位置で聴こえる音と想像いただけたらわかりやすいと思います」（宮崎さん）

「SVC300C」と「SVC300F」はボディ形状が異なるので、それぞれのピックアップが拾う響きも当然異なる。そのため、胴共鳴のシミュレーションもそれぞれの性格に合うように作り込まれているのが大きな特徴といえる。

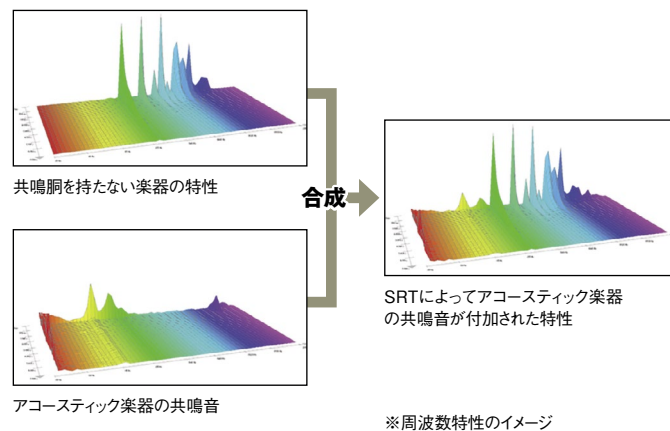
「どちらのモデルでも幅広い音楽ジャンルに対応できるのですが、振り切った音作りをした場

挑戦のポイント1

豊かな胴共鳴を再現する「SRTパワードシステム」を搭載

「SRTパワードシステム」は、共鳴胴を持たない楽器に対し、アコースティック楽器の自然な響きをリアルタイムに与える技術で、サイレントギターやサイレントバイオリン、サイレントベースで採用されている。アコースティックチェロの音の響きを解析し、そこからそれぞれのサイレントチェロの個性に合った胴共鳴音の特性を作り上げている。これにより、従来のサイレントチェロが持っていたサウンドにより豊かな胴共鳴が加わることとなり、アコースティックな響きを求める奏者も扱いやすくなった。

※SRT: Studio Response Technology



挑戦のポイント2

好みの音を作り込めるコントロールパネル

「SVC300シリーズ」のコントロールパネルには、ピックアップが拾った音と、胴共鳴をシミュレートした音をブレンドできるノブに加え、各モデル用に最適化されたトレブル&ベースのイコライザーが新たに搭載された。これらと2つのサウンドタイプ、2種類のリバーブの組み合わせで、エッジの効いたシャープなサウンドからアコースティックな箱鳴りにあふれた豊かな響きまで、幅広いサウンドメイクが可能。ヘッドホンを使用する場合は、弦や楽器の響きも合わせて感じられる「オープンタイプ」のものがおすすめです。またチューナー機能も搭載され、基準ピッチの変更にも対応。旧モデルではひとつだったメインボリュームもLineとPhoneに分離され、使い勝手が向上している。

